

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 25 日現在

機関番号：34301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370059

研究課題名(和文) 初期チベット論理学成立史解明のための基礎研究

研究課題名(英文) Basic Research for the Investigation into the Early Tibetan Logic

研究代表者

福田 洋一 (Fukuda, Yoichi)

大谷大学・文学部・教授

研究者番号：00181280

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、11世紀から15世紀頃までのゲルク派興起以前の初期チベット論理学のテキストを電子テキストとして入力し、横断的なKWIC検索が出来るようにすると共に、テキストファイルを提供することによって、初期チベット論理学の形成過程を解明する基礎資料を構築することを目的とする。特に近年発見されたカダム派の難読な写本を主として入力しているため、研究者はこれらの文献を研究する際に悩まされる写本読解の労苦が大きく緩和されることになる。

研究成果の概要(英文)：In this research, by inputting as electronic data almost all texts of the early Tibetan logic before the rise of the Gelug sect, we opened a website that provides a cross-textual KWIC (keyword in context) search system as well as files of the inputted text. This research aims to construct basic materials that will help clarify the formation process of the early Tibetan logic. Since we have been mainly inputting the Kadam school's manuscripts discovered in recent years, which are considerably illegible, we will drastically reduce the trouble researchers face in reading those manuscripts.

研究分野：チベット仏教

 キーワード：チベット論理学 カダム派 ゴク・ロデンシェーラップ チャパ・チューキセンゲ サキャ・パンディ  
 タ チョンデンリクレル

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

15世紀初めに宗祖ツォンカパを中心にチベット最大宗派ゲルク派が成立すると、チベットの学問仏教の中心はゲルク派が担うこととなり、それまでチベット仏教を牽引してきたカダム派はゲルク派に吸収されていった。そのためカダム派の文献は、ゲルク派の文献に取って代われ、木版出版の始まる前で写本でしか伝わっていなかったこともあり、多くの文献が散逸していった。インドから伝わった仏教論理学は、カダム派の元で受容され変容していくうちに、チベット独自の論理学を発展させ、それもまた後にゲルク派によって継承されつつも整理され、仏教論理学受容初期に行われていた多くの議論は忘れ去られることとなった。

しかし、2002年になってダライラマ5世が私的に収集していた写本群がラサのお堂から発見され、それまで失われたと思われていたカダム派の文献が大量に世に知られることとなった。しかし、それらの写本は草書体で書かれ、さらに影印版の印刷が雑で小さいこともあり、文字の判読に手間取るため、研究はごく少数の人がごく少数のテキストに取り組むのみで、ほとんど進展していなかった。

### 2. 研究の目的

以上のような状況の中で、本研究においては、初期チベット論理学の形成過程を解明するための基礎資料として、新出のカダム派の論理学書を始め、ゲルク派成立以前のチベット論理学書をできるだけたくさんコンピュータに入力し、横断的な検索や入力テキストの提供、科段の抽出、語彙集の作成などを行うことを第一の目的として始められた。

同時に、以上の基礎資料を元にして、研究分担者や研究協力者が個々の概念についての初期チベット論理学の横断的な研究に着手することも目的の一つであった。また、個々の研究だけではなく、共同でテキストの翻訳を行っていくことも申し合わされた。しかし、これらの「研究」も「検索」も電子テキストの準備が前提となるため、テキスト入力が本研究の急務であった。

### 3. 研究の方法

以上の目的に対応して、本研究においては以下の三つの研究方法を採用する。

(1) アルバイトに依頼してチベット論理学書の入力および必要に応じて科段の抽出を行う。

本研究における最大の目的は、判読の難しい草書体テキストの電子テキストの入力である。これは南インドに再建されたゲルク派四大寺院の一つセラ寺出身で、国家認定の博士号(ゲシェー・ハランパ号)を取得し、現在は日本に帰化した松下賀和(チ

ベット名トゥプテン・ガワ)氏に依頼した。松下賀和氏は、既に大谷大学真宗総合研究所において、大谷大学所蔵の草書体稀覯本の入力を担当し、一定の成果を挙げていた。本研究においても、影印出版されたカダム全集の論理学書の読みづらいテキストの入力を精力的に実施してくれた。また木版本や活字化されたテキストの入力は、大谷大学大学院のチベット人留学生に依頼した。科段の抽出についてもこれらチベット人留学生に依頼した。

(2) 入力テキストを処理するコンピュータプログラムを作成して検索機能を実現するWebサイトを構築する。

これについては、研究代表者が大谷大学の人文情報学科においてプログラミングの教育を行っており、また長い間チベット語のプログラム処理に携わってきたので、本研究においても様々なコンピュータ処理を担当し、Web上にKWIC検索を含む諸テキストを横断した検索サイトを構築した。

(3) 研究代表者・研究分担者・研究協力者がそれぞれの研究関心に応じて個々のテーマを設定して、それぞれの概念についての研究を行う。

研究方法としては、特定の概念が様々な論者の間でどのように規定されているか、その相違をテキストの比較を通して探ることになる。

(4) チベット論理学独自の概念の形成に関わるテキスト(の一部)を選定し、その翻訳を行う。

具体的には、チベットにおいて成立したと考えられる「語・概念」「概念を述定する根拠」「その両者の担い手」という三つ組みの概念について初期チベット論理学者たちは詳細な議論を展開した。その箇所の読解翻訳を行う。

### 4. 研究成果

(1) テキストの入力

カダム全集所収のもの(あるいはそれを活字化したもの)には以下の論理学書が含まれる。特定テーマの各論あるいは小品以外は、一点を除いて全て入力済みである。ダルマキールティのもっともまとまった論理学書『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』の注釈が多いので、同書はPvinと略す。

ゴク・ロデンシェーラプ(1059-1109)  
・『ニヤーヤ・ピンドゥ・ティーカー要義』(21枚)未入力。これについては、研究分担者石田尚敬が2016年度チベット学会において研究発表を行った。

・『Pvin難語釈』(144枚)80%程度入力済み。引き続き補填入力を続ける。

チャパ・チューキセンゲ(1109-1169)

- ・『Pvin 要義』(13 枚)未入力。科段のみのテキスト。
- ・『Pvin 註・般若の光』(197 枚) Pascale Hugon 博士によって入力済みだが校正の要あり。
- ・『論理学総論・心闇の払拭』(97 枚) 入力済み。
- ツァンナクパ・ツォンドゥセンゲ(12 世紀)
- ・『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ註』(210 枚) 真宗総合研究所で入力済み。
- ニヤク(生没年不明)
- ・『論理学の一般用語要略』(8 枚) 入力済み。
- チャンチュプセムパー・ジュニャーナシュリー(生没年不明)
- ・『正理の心髄・真実要略を明らかにする日光』(16 枚) 入力済み。
- ・『Pvin 複註』(101 枚) 未入力。2017 年度～2019 年度科研費基盤研究(C)「インド・チベット論理学相互理解のための基礎資料の構築」において入力予定。
- チュミクパ・センゲペル(13 世紀)
- ・『論理学七書の要義』(77 枚) 入力済み。
- ・『Pvin 複註』(152 枚) 入力済み。
- チョンデンリクレル(1227-1305)
- ・『Pvin 複註』(158 枚) 90% 入力済み。引き続き完成を目指す。
- ・『論理学七書を飾る華』(98 枚) 入力済み。
- ・『関係の考察(ダルマキールティの著作)の科段』(4 枚) 未入力。
- ・『論争学(ダルマキールティの著作)要義』(7 枚) 未入力。
- ・『論争学を飾る華』(72 枚) 入力済み。
- ツルトゥン・ツォンドゥーセンゲ(1150-1210)
- ・『論理学・般若の灯』(67 枚) 入力済み。Pascale 博士による校訂本あり。
- ロドゥーツンメー(生没年不明)
- ・『論理学の要義』(61 枚) 入力済み。
- 著者不明
- ・『プラマーナ・ヴァールティカ注』(122 枚) 入力済み。
- ・『論理学の善説』(47 枚) 入力済み。
- ・『論証因の三条件の講義録』(34 枚) 未入力。
- ・『直接知覚章註』(30 枚) 未入力。
- ・『論理学の真実要略』(21 枚) 入力済み。
- ・『自己認識の論証』(7 枚) 未入力。

カダム全集に含まれないプレゲルク派の論理学書に以下のようなものがある。

- 著者不明
- ・『論理学の真実要略』入力済み
- 構成はチャパの『心闇の払拭』と極めて近い関係にあるので、著者はロンチェンラプジャムパ(1308-1364)と伝えられるが、実際にはより古い著作であると考えられることを研究代表者福田の「初期チベット論

理学書の科段構成について」において指摘した。

- サキャパンディタ(1182-1241)
- ・『論理学・正理の宝蔵』財団法人東洋文庫において入力済み。サキャ派の論理学書でカダム派の論理学に批判的な立場を取るが、構造や概念はカダム派の論理学のものと共通である。
- プトゥン・リンチェンドゥップ(1290-1364)
- ・『Pvin 複註』(木版本 300 枚) 2017 年度～2019 年度科研費にて入力予定。
- ポトン・ジャンペーヤン・ショレワ(生没年不明)
- ・『Pvin 註』(153 枚) 未入力。2017 年度～2019 年度科研費にて入力予定。

他にプレゲルク派期の論理学書としてサキャ派の『論理学・正理の宝蔵』に対する注釈書 2 点、『プラマーナ・ヴァールティカ注』3 点、論理学総論 2 点などがあるが、時代的にはゲルク派の成立時期に近いので、本研究の対象からは外している。

本研究の最大の価値は、この入力テキストの提供にある。なぜならば、判読が困難で時間と労苦を要するカダム派の論理学書の大部分をテキストファイルで提供できるからである。これは画期的な成果であると言える。入力テキストは、未校正であるので、実際に研究する際には原典と比較しながら読解する必要はあるとしても、少なくともざっと読んでいる限りにおいては、大きな誤りはないように思われる。読んで意味の通じないところを確認するだけでも十分である。

同じカダム全集には他にも様々な分野の文献が含まれている。総数は数百点に上ると思われるが、本研究プロジェクトが達成したように、一つの分野の主要テキスト全てが入力されて提供されている例はない。

## (2) 検索サイトの構築

以上の入力テキストを統一的なフォーマットに整形し、横断的な検索ができるサイトを構築した

(<http://tibetan-studies.net/tiblogsearch/>)。検索結果は、当該検索ワードを含む段落を表示するか、KWIC(Keyword in context) 検索かのいずれかを選択できる。通常は段落を表示した方が、前後のコンテキストがわかってよい。

入力テキスト全てを横断して検索もできるが、いずれかのテキストを選択して検索もできる。100 件以上ヒットした文献については、検索結果は 100 件に限っている。そもそも 100 件以上ヒットするのは、検索語が曖昧すぎるからである。

当初、何もなしに検索を試してみようとしたとき、思いつく単語は少なく、この検

索だけでは十分な研究資料とならないのではないかと思われた。

しかし、実際に研究を始め、あるいは翻訳を始めて見ると、検索したい単語は自然に出てくる。今研究している文献に現れる用語が他の文献でどのくらいの頻度で使われるか、あるいはどのようなコンテキストで使われるかを瞬時に検索できる。そのことにより、初期チベット論理学における用語の変遷や、ある種の偏りから、その概念の特定の意味や、あるいはそれらの文献の系統などについて考察する手がかりを得ることができる。

チベット論理学に独自の用語だけではなく、後代のゲルク派の論理学では使われなくなった用語が出てきたとき、他の文脈での使用例を集めることによって帰納的にその意味を考えることも可能になる。

### (3) 個々の概念などについての各研究者の研究

研究代表者福田は、初期チベット論理学の形成過程の一端を明らかにするために、特定の概念や論理学総論の構造がどのように変遷したかを考察した。

初期チベット論理学書は、ダルマキールティの名著の一つ『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』の注釈が、論理学概論と呼べるような、独立の論理学全体をまとめて書いた著作群に分かれる。その他に時代が新しくなるとダルマキールティの最初の名著『プラマーナ・ヴァールティカ』の注釈が書かれるようになるが、これにはサキャパンディタ(1182-1241)が、チベットに亡命してきたインド仏教最後の僧院ヴィクラマシーラの僧院長にインド仏教の最後の伝統を受け、『プラマーナ・ヴァールティカ』の研究を導入したことに起因する。ゲルク派が成立してからは、『ヴィニシュチャヤ』の注釈はほとんど書かれず、一方『ヴァールティカ』の注釈は膨大な数に上った。したがって、それ以前の最初期のチベット論理学は、ダルマキールティが『ヴァールティカ』を整理して、より体系的に書き直した『ヴィニシュチャヤ』の学習と解釈によって形成された。そこにはチベット論理学最初期のゴク・ロデンシェーラブによる『ヴィニシュチャヤ』およびインドでのほぼ唯一の注釈書であるダルモッタラ註の翻訳、そしてゴク自身の『ヴィニシュチャヤ』に対する注釈が大きな影響を与えている。

しかし、いくつかのチベット論理学独自の概念は、一部使われてはいるが、それについて詳細な議論が展開されるには至っていない。

その約50年後に現れたチャパ・チューキセンゲは、『ヴィニシュチャヤ』の注釈も書いているが、現存する最古のチベット論理学概論を書いている。その前後関係は必

ずしも確定されていないが、同じ議論を比較したとき、概論で詳細に展開された議論が注釈では要約されている場合があり、恐らく論理学概論の方が成立が早いと推定される。

さて、その論理学概論の科段構成を比較していった場合、いくつかの特徴を指摘することが出来る。個々の著作によって細かい異同はあるが、チョンデンリクレルの著作を除くと、大きな構造は共通している。すなわち、全体が知一般あるいは対象一般に関する部分と、正しい認識(プラマーナ)そのものに関する部分とに分かれ、後者は概ねダルマキールティ由来の直接知覚と推理の議論に相当する。一方、知一般・対象一般についての議論にはチベット論理学独自の構成が見られる。またサキャパンディタの著作が論理的諸概念を並列に項目として取り上げ、ダルマキールティの『ヴァールティカ』に基づいて詳論したが、その後は、同様にこれらが個別の項目として並列に論じられるようになり、ゲルク派の時代になると、それを中心としたドウラと呼ばれる論理学教科書が現在に至るまで書き継がれ、チベットの僧院の初等教育に用いられるようになる。初期のカダム派のものとゲルク派のものを比べると、サキャパンディタを結節点としながらゆっくりと時代が移り変わっていった印象を受ける。

もう一つの特徴は、正しい認識に関する部分が全体の7、8割を占め、さらに推理の議論が全体の半分以上を占めていることである。このことから、推理の重要性が際立っていることが分かる。ただしその分科段構成も複雑を極め、その相違を比較できるまでには至っていない。

さて、チベット独自の概念(論理学に限らず用いられる)にldog pa(他者の排除に関わるが和訳は難しい)を巡る三つ組みの概念がある。それらは語の構成からして明らかにチベット語の使用を前提として作られている。この三つ組みの概念は、もう一つチベット仏教独自の「語・概念」「述定の根拠」「両者の担い手」(これらはチベット語では、mtshon bya、mtshan nyid、mtshan gzhi というように同じ語根を使用して明らかに三つ組みの関連した概念である。)と密接に関係している。大雑把にはその三つ組みのそれぞれが一対一に対応していると言ってもいい。この後者の三つ組みの概念については、チャパの論理学概論にも相当な分量を尽くして詳細な議論が展開され、それはその後のゲルク派以前の論理学概論書に踏襲される。のみならず、『ヴィニシュチャヤ』でもその巻頭に詳細な議論を掲載していることが多い。しかし、これらの議論はゴクの著作の中には見出されない。ゴクからチャパまでの50年間にそれらについての議論が起こり、それを受けてチャパが自己の見解を詳細に論じることに

なっただと思われる。また、その議論には、ldog paに関する概念が既定の概念として使用され、「語・概念」などの三つ組みの概念の定義に使用されている。ということは、これらはさらに古い起源を持つと思われるが、これもまたゴクの著作には見られない。

以上からゴクからチャパまでの50年の間にチベット論理学の基礎を築くような多様な議論が行われたと推定されるが、残念ながら現在残されている文献の中にはそれを確認することが出来ない。

この間の事情をさらに考察するためには、後代の著作に、現在では著作の失われた人に対する言及や引用を丹念に収集して、その議論の意味を推定していく必要がある。

研究協力者崔境眞は、『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』に対する、チベットで著された諸注釈書の比較研究を行った。取り上げたテーマは刹那滅論証である。そのダルマキールティの論証方法をめぐって、カダム派出身の学僧たちのそれぞれの解釈を分析したことによって、初期チベット論理学において刹那滅論証をめぐる解釈や批判および継承の流れを辿ることができた。その結果、刹那滅論証に関して言えば、カダム派の学僧たちは、インド仏教論理学の思想を受け継ぎながら、インド語ではなく母国語のチベット語の上で構築される概念を使って理解を深めていったことが分かった。本研究の成果としては、カダム派の思想が後代のチベット仏教独自の思想体系の土台になったことを、刹那滅論証という実例をもって明らかにしたことである。

下記の「5. 主な発表論文等」では、初期チベット仏教論理学の最後期からゲルクによるチベット仏教論理学の整理統合直前までの転換期に活動したチョンデンリクレルの刹那滅論証に対する解釈を明らかにした。チョンデンリクレルの思想は、後代のチベット仏教世界でしばしば厳しく批判されるが、本研究で扱った刹那滅論証に限って言えば、むしろ、ゴクやチャパを始めとする初期チベット論理学者の視点よりも彼の視点のほうが後代に受け入れられていることが分かった。「5. 主な発表論文等」では、ゴクやチャパほど著名ではないが、初期チベット仏教論理学者の一人としてポドン・シヨレワという人物（12～13世紀頃）の刹那滅論証理解を検討した。彼は、歴史書によればゴクやチャパが所属するカダム派の人物として分類されるが、当該問題に関する彼の理解は、サキャパンディタの理解に従っていることが判明した。さらに、彼が活動していた当時、既に刹那滅論証をめぐる様々な異見や議論があったようで、ポドンは、自分が入手した情報を簡単にまとめて紹介している。この論文では、彼が提示している諸説を確認しなが

ら、それらが誰の理解に当たるのか、それぞれの出処を特定することができた。「5. 主な発表論文等」では、初期チベット仏教論理学によって形成された思想的土台の上で、刹那滅論証の文脈で創られたチベット語の術語が、最終的には後期チベット仏教論理学において刹那滅論証の文脈を離れてなお応用されるに至っていることを提示した。

初期チベット仏教でどのような議論がなされていたかを無視して後期チベット仏教論理学のみを研究対象とした場合、このような術語の応用は、チベット仏教独自の思想、または、インド仏教論理学から隔離された思想であると見做される可能性がある。しかし、思想的発展のプロセスを辿って遡ることによって、チョンデンリクレルの影響を経ていること、それ以前にも様々な理解や議論があったこと、さらに、ゴクやチャパらの理解はインド仏教論理学思想からそう離れていないことを確認することができた。逆に言えば、刹那滅論証理解をめぐる、インド仏教論理学 初期チベット仏教論理学 転換期 その後のチベット仏教論理学という流れで思想的発展のプロセスを描けることができた。

#### (4) 特定のテーマに関するテキストの翻訳

本研究では、判読の難しいテキストを一気に大量に入力してテキストファイルを準備した。しかし、初期チベット論理学の難解さは、それだけではまだ軽減されない。議論そのものが難解だからである。我々は後代のゲルク派の論理的な議論については、難解であるとしてもある程度理解ができ、またもし理解できなければチベット人高僧に質問することもできる。しかし、ゲルク派以前、とりわけカダム派の初期の議論は後にほとんど忘れ去られてしまった議論である。しかも当時の人たちにとっては、実際に対面で詳しく議論している内容であるので、何が問題であり、それに対してどのような反論があり得、そして自説をどのように論証するかについての理解を持った上で、その簡潔なまとめを文章に残したと考えられる。したがって、その背景を知らない我々にとっては、一体何を議論し、何に反論し、それに対して何を論証しているのかが、表面的なテキストの文法的・語彙的な読解では理解できないことになる。

本研究において、テキストの判読と語彙の検索が可能となっても、まだその議論の意味や文脈の理解にはほど遠い状況にある。これらは、多くのテキストの同じ議論を比較し、その中から理解できる部分を少しずつ広げていくという研究が必要とされる。

本研究においては、研究代表者福田がこれまで（カダム派の写本が発見される以前から）取り組んでいた、「語・概念」「述

定根拠」「両者の担い手」という三つ組みの概念についての議論を含むテキストの翻訳を進めている。上に書いたように、まだ不明の箇所が多く残っているが、その錯綜した議論をできる限り読解していく努力を続けている。その成果の一部は、2017年度印度学仏教学会で発表予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8 件)

CHOI, Kyeongjin, “bCom ldan rig ral on the Methods for Proving Momentariness”, 査読有, Journal of Indian and Buddhist Studies, 65-3, 1289-1294, 2017.

石田尚敬「瞑想者の認識をめぐるダルモータラの考察 『知識論決訳注』を中心に」査読無『愛知学院大学禅研究所紀要』45, 29-40, 2017.

福田洋一「チベット論理学における ldog pa の起源」『印度学佛教学研究』査読有, 65-1, 404-410, 2016.

石田尚敬「仏教論理学派における分別知の考察 シャーンタラクシタとダルモータラの比較から」査読有, 『仏教学』57, 19-36, 2016.

崔境眞「刹那滅論証に関する Bo dong 'Jam pa'i dbyangs Sho re ba の理解 : Pramanaviniscaya に対する註釈を基にして」査読有『印度学佛教学研究』63-3, 1329-1332, 2015.

福田洋一「初期チベット論理学書の科段構成について」査読有『印度学佛教学研究』64-1, 468-475, 2015.

崔境眞「ダルマリンチェンの svabhavapratibandha 理解 : 本質的結び付き ('brel ba) の定義をめくって」査読有『日本西蔵学会々報』61, 29-41, 2015.

石田尚敬「ダルモータラによる分別知の考察」査読有『印度学佛教学研究』62-2, 988-984, 2014.

〔学会発表〕(計 8 件)

福田洋一「霧の中の初期チベット論理学」人文情報学の最前線 2016, 2016年12月17日, 大谷大学(京都府京都市)

石田尚敬「ゴク・ロデンシェーラップ著『五巻本の解説』の構成」第64回日本チベット学会学術大会, 2016年11月20日, 身延山大学(山梨県南巨摩郡身延町)

崔境眞「チャパ・チューキセンゲの刹那滅論証理解 Pramanaviniscaya に対する註釈を中心に」第64回日本チベット学会学術大会, 2016年11月20日, 身延山大学(山梨県南巨摩郡身延町)

福田洋一「チベット論理学における ldog pa の起源」第67回日本印度学仏教学会, 2016年9月3日, 東京大学(東京都文京区)

崔境眞「刹那滅性の論証方法に関するチ ョムデンリクレルの解釈

Pramanaviniscaya に対する註釈を中心に」第67回日本印度学仏教学会, 2016年9月3日, 東京大学(東京都文京区)

福田洋一「初期チベット論理学書における科段構成について」第66回日本印度学仏教学会, 2015年9月20日, 高野山大学(和歌山県伊都郡)

福田洋一「カダム派論理学書の(秘)KWIC 検索サイト」第2回チベット情報交換会, 2014年10月24日, 苫小牧市民会館(北海道苫小牧市)

FUKUDA, Yoichi, “Online Search System on the texts of Tibetan Logic in the Pre-Gelugpa Period,” The Fifth International Dharmakirti Conference, 2014年8月27日, Heidelberg (Germany).

〔その他〕

ホームページ等

[http://tibetan-studies.net/early\\_tibetan\\_logic/](http://tibetan-studies.net/early_tibetan_logic/)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

福田 洋一 (FUKUDA, Yoichi)

大谷大学・文学部・教授

研究者番号: 00181280

### (2) 研究分担者

石田 尚敬 (ISHIDA, Hisataka)

愛知学院大学・文学部・講師

研究者番号: 80712570

### (3) 研究協力者

崔 境眞 (CHOI, Kyeongjin)